〈研究ノート〉

移民の先駆・星名謙一郎の生涯

飯田耕二郎

はじめに
一、星名謙一郎の先祖と生いたち
二、ハワイ時代
三、テキサスおよび一時帰国時代
四、ブラジル時代
むすびにかえて

はじめに

星名謙一郎は、ハワイ、テキサス、ブラジルなど、海外各地で明治・大正時代の移民の草創期に活躍し、数奇な運命をたどった人物である。

筆者は、もともと日本人の海外移住地に関心をもっていたが、この星名謙一郎という人物をはじめて知ったのは、

アメリカ合衆国のテキサス州における米作について調べた際であった。たまたま外務省通商局の『明治四十三年・第二回移民調査報告』なる資料に、初期の米作者として、同志社社長であった西原清東や、日本の労働運動の創始者の一人、片山潜などと共に、この星名謙一郎の名があった。そのめずらしい姓のゆえ、彼が同志社女学校の有名なデントンの世話をした星名ヒサの夫であり、元同志社大学学長の星名秦の父親であることがほどなくわかった。同志社に関係があるということもあり、西原清東とともに、彼についても調べていくうち、彼はテキサスのみならず、海外のあちこちで転々と移住生活を送っていたことがわかり、大変興味深く思った。彼について以前に少し紹介したこともあったが、[1] ここではさらにその後集めた、主として国内にある彼に関する資料をまとめて、彼の生涯を追ってみたいと思う。しかし、なにぶん彼は永年海外で活躍した人物であり、国内中心の資料では不十分なことはもとより明らかである。さらに彼は前述のように、海外といっても一カ所に定着して生活したのではなく、各地を転々とする人生を送っており、あまりまとまった記録も書き残していないようで、彼の考え方や、他の人物との関係などもほとんど不明である。明治・大正時代からかなりの年数を経た今、彼がいつ、どこで、何をしていたかということもわからないところがあり、いわば謎めいた人物で、逆に、それだけ調べがいがある人物ともいえる。ともかく、現段階では不十分ながらも、研究の一応の区切りとして、ここで彼の生涯のあらましを報告したい。

一　星名謙一郎の先祖と生いたち

彼は、一八六六年（慶応二年）一〇月一〇日、父星名幸旦（ゆきあさ）、母コウの長男として、伊予吉田（現在愛媛県北宇和郡吉田町）に生まれた。彼の兄弟は、姉と妹、弟があった（家系図参照）。彼と同じ頃に吉田で生まれ、のち有名になった人

物としては、山下汽船を創設し、海運王となった山下亀三郎と、森村組の支配人でわが国の海外貿易の先駆者として有名であった村井保固がいる。しかし、彼らは星名とは直接のつながりはなかったようである。

彼の先祖については、彼の長男である星名秦元学長の歿後、一九八一年に発刊された『星名秦の生涯』の中の「星名秦のあゆみを辿って」という章でうかがうことができる。これによると、星名家の先祖は、仙台伊達藩の藩士だったようで、伊達政宗の長子秀宗が分家して、伊予宇和島に封ぜられたとき、随従する家臣に星名善右衛門という人がおり、この善右衛門が、星名家の家祖ということになる。さらにこの人は、秀宗の五男宗純が伊予吉田の地に分家したとき、これに従い、これより代々、伊達家の家臣として伊予吉田に住み、謙一郎が一四代目ということである。

この記述を手がかりに、彼の先祖や出生について調べるべく、一九八三年八月、愛媛県を訪れた。宇和島市立伊達博物館内の文献には、一六五五年（明暦元年）八月、宗純が吉田三万石分地せられる際の付御人のなかに「星名善右衛門」の名がみられ、[2] 星名家はもともと宇和島藩士であったことがわかる。また吉田分地の際、分人された人々のその後の状況を書いた一六八六年（貞享三年）の史料[3]の中に「御台所方　四人分五石　星名甚九郎」なる人物が出ており、先の善右衛門の子と考えられる。吉田町立図書館蔵の「吉田絵図」（分地当時の最古の地図）には、この星名甚九郎の屋敷名がみられる。現在吉田病院の北西角、古い長屋門の残っているあたりと思われる。藩主の墓所臨済宗大乗寺に星名家先祖の墓もならんでいるが、過去帳によると、この甚九郎の名が最も古く、一六八八年（元禄元年）に歿している。時代は下り、何代かを経て、謙一郎に至る星名家の家系図は次のようになると考えられる。[4]

星名家家系図

- 星名善右衛門 ― 星名甚九郎（～元禄元年（1688））
- 星名甚太夫（～天保十二年（1841））
  - 〔妻〕（～嘉永七年（1854））
  - 星名善八幸生（甚九郎）（～元治元年（1864））
    - 星名善八幸旦（甚内）（天保九年（1838）～明治十六年（1883））
      - 〔娘〕（伊尾喜勝之進充星 ―）（～慶応二年（1866））
      - コウ（天保十四年（1843）～大正八年（1919））
      - ヒロ
      - 星名謙一郎（慶応二年（1866）～大正十五年（1926））
        - ヒサ（末光）（明治七年（1874）～昭和二十九年（1954））
        - 星名秦（明治三十七年（1904）～昭和五十二年（1977））
          - 幸子（明治四十一年（1908）～）
          - 江上波夫
      - キヨ（明治四年（1871）～？）
      - 安尾（明治六年（1873）～明治二十三年（1890））

謙一郎の父、幸旦については、維新後の「庚午（明治三年）十二月改　序名簿」[5]に「名古屋県十二等出仕　給禄十石官禄八石二斗」とある。また幕末の一八六一年（文久元年）における「吉田市街図」[6]には、星名甚内の屋敷がみられる。謙一郎はおそらくこの屋敷で生まれ、育ったのであろう。いまはもちろん人手にわたっているが、吉田町西小路、現在宇和島自動車吉田営業所の国道をへだてた向い側のあたり、城下町の風情がよく残されている町並の一角に

あり、当時のものではないと思われるが、格式のある大きい屋敷がたっている。

彼の幼少の頃の記録はまったくない。ただ一つ彼の肝の太さを示すエピソードが残っている。九歳ぐらいのとき、隣町の卯之町（現東宇和郡宇和町）の人達など大勢で東京へ見物に行ったとき、彼一人途中でいなくなって先輩達が心配して探したところ、一人で一流の旅館にとまって堂々とかまえていたという。[7] 後に彼は東京へ遊学し、一八八三年（明治一六年）に開校したばかりの東京英和学校（現青山学院）に入学した。そのころ、四国のこの地方の士族や庄屋クラスの子弟が東京や京都に遊学することは、とくにめずらしいことではなかったらしい。たとえば、後に彼の妻となる末光ヒサの兄達、卯之町の青年五名が一八八八年（明治二一年）、同志社に来て学び、この地と同志社と深い関係を結ぶきっかけとなったのである。さらに彼女の長兄類太郎は、新島襄なきあと、東京まで行ったとのことである。[8] それはともかく、彼は東京では麻生区狸穴（まみあな）町一番地に住んだ。現在の港区麻生狸穴町である。このあたり大名屋敷のならんでいたところであるが、吉田および宇和島の伊達藩の屋敷はない。どういう関係でここに居住したかは不明である。またここから東京英和学校のある赤坂区青山南町七丁目（現在渋谷区渋谷四丁目）まで比較的近いが、入学の動機がただそれだけのことであったのかどうかも明らかでない。在学中にクリスチャンになったことも確かではないが、少なくともキリスト教の影響を受けたことは事実であろう。ちなみに当時の東京英和学校の総理（校長）および神学教員はR・S・マックレー[9]（Robert Samuel Maclay, 1824-1907）であった。星名の名は青山学院の卒業者名簿にはなかったが、当時の「東京英和学校一覧」[10]に、一八八七年（明治二〇年）の予備学部卒業生としてでている。なお彼の卒業後の所在地は上海となっている。彼がいつ、何のために上海へ行ったのか、今のところわからない。

二　ハワイ時代

彼が、上海から一度日本にもどりハワイに渡ったのか、あるいは上海から直接ハワイに渡ったのか不明である。しかし、おそくとも一八九一年（明治二四年）には彼はハワイに渡航していた。[11] 彼がハワイを志したのはなぜか。やはり当時、移住先としては一番容易に行けたからではないだろうか。ハワイへの日本人移民は、周知のように、明治元年の「元年者」以来しばらくとだえていたが、この頃はまさに「官約移民」時代であり、一八八五年（明治一八年）第一回のシティ・オブ・トーキョー号による渡航以来、一八九四年（明治二七年）の第二六回三池丸をもって終った官約移民は、二万九一三九人に及んでいる。これ以後さらに「私約移民」時代など続いていくが、[12] ともかくかなり初期に、彼はハワイに渡って、伝道師として活躍するのである。彼のことについて言及している資料を、まず日本人のものからみてみよう。

多年ハワイ伝道に従事した奥村多喜衛牧師による『布哇傳道三十年略史』（一九一七年）の、一八九一年（明治二四年）、ハワイ島のヒロ教会の[13]記事には次のように述べられている。

一月十八日ヒロ教會は會員七十二名を以て組織せられ。その設立式と共に岡部牧師就任式を擧ぐ。從來同地方信者は假りに籍を外人教會に置きしが。茲に初めて自己の教會を設立するを得て。教勢頓に昂り。歳の終には會員の數百十六名を算するに至れり。岡部氏は労働者中より星名謙一郎氏を得て傳道助手となし。[14]（傍点筆者。以下同じ）

さらに翌一八九二年には、「星名氏はパヽイコウに傳道す。[15]」とある。パパイコウ（Papaikou）はハワイ島の地図にみられるように、ヒロ（Hilo）のすぐ北隣りの地である。

また教会別のヒロ基督教会の項目にも、

千八百八十八年（明治二十一年）岡部次郎氏傳道のため桑港より來り。布哇傳道會社に聘用せられしが。當時ホノルルは已に盛んに傳道せられ居たるを以て。氏はヒロ市を中心として近傍各耕地に道を傳ふることとなれり。氏の熱心と機智は忽ちにして人心を収め。未た一年を出でざるに已に六十八名の悔改者を起す。千八百九十年七月氏はホノルルセンツラルユニオン教會に於て。按手禮を領し。翌年一月十八日會員七十二名を以てヒロ教會を組織す。是れ實に布哇に於ける最初の組合教會なりとす。此歳星名謙一郎氏を得て傳道助手となし更に峯岸繁太郎氏を得てホノカア地方に傳道す。續て内外有志者の賛助を得て。千六百弗を以て會堂を新築せり。是れ亦た布哇に於ける最初の日本人教會堂なり。[16]

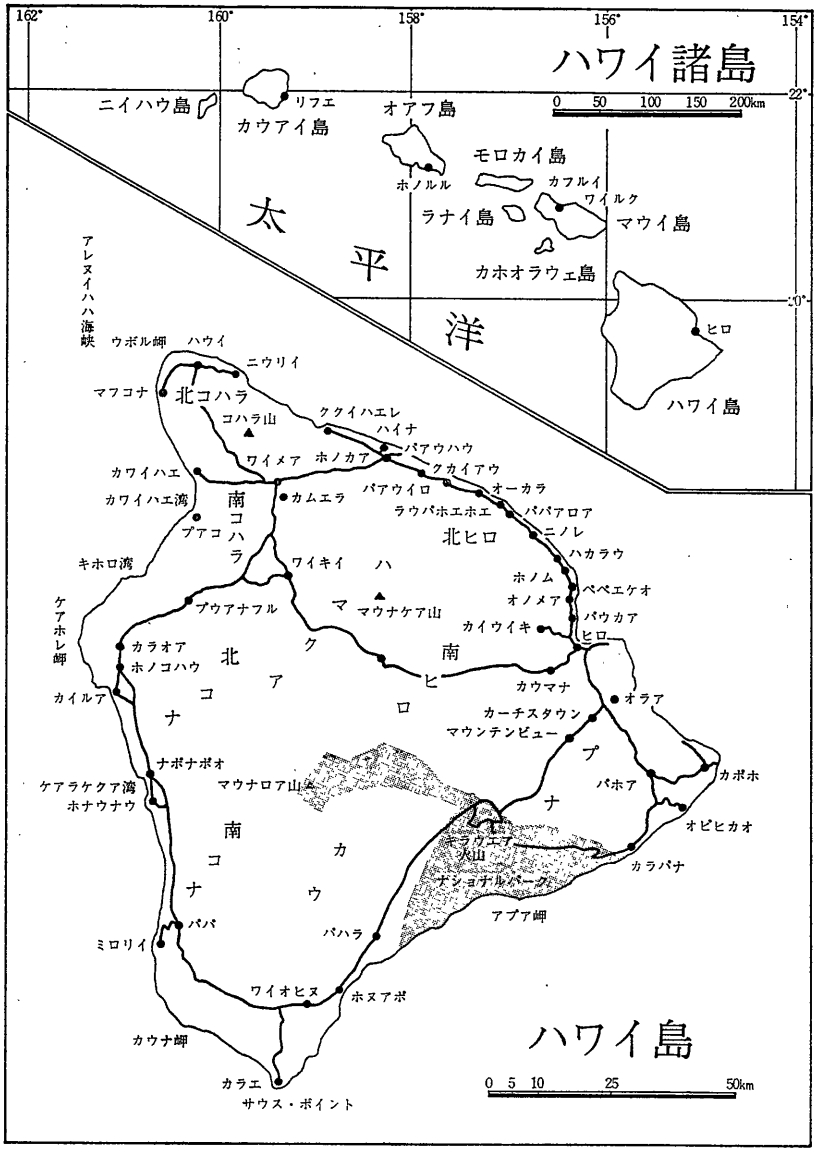
パパイコウ基督教会の項目には、

岡部次郎氏ヒロより此地に傳道の手を延せしが。その初めて定住傳道者の送られしは千八百九十三年にして。最初の傳道者は星名謙一郎氏なりし。千八百九十四年五月佐々倉代七郎氏夫妻來任。[17]

とあり、一年ほどでやめたことになっている。この頃、一八九二年（明治二五年）一月、ハワイ島の北部ククイハエレ（Kukuihaele）耕地において同胞銃傷事件がおこり、彼がこの事件にかかわったことを示す記事がある。

布哇島ハマクア（Hamakua）郡ククキハエレ耕地に於て就働中の同胞東伊平が白人ルナ〔労働監督――筆者注〕にピストルで脚を負傷せしめられたので巡回裁判所に告訴した結果被告白人ルナは六ケ月の禁錮に付されると共に罰金を科せられた。其所で彼れは上告し上等裁判所で判事及立合人に金錢を賂ひし爲め被告に無罪の判決を上等裁判所は下したのである。此所に於て原告は大いに閑却したが東伊平を助け其の黒白を明かにせんと在留同胞有志鈴木國蔵、山本晋、佐藤祐之、小野目文一郎、星名謙一郎、其他十數名の者が相謀り演説會を開き、伊平救助費と上訴運動費を弘く同胞より集めんと義捐金募集運動を起し大審院に上告せんとしたのである。所が此の擧に恐れた被告は遂に移住民局及總領事館に仲裁方を依頼し来たので遂に伊平の扶助費三百五十弗を出さしめて日本に伊平を帰國せしめたものであると傳へられてゐる。[18]

いっぽうハワイアン・ボード関係の記録では、彼はどうなっているだろうか。The Hawaiian Mission Children's Society Library 所蔵の資料のなかで、[19] 先の奥村の記事にもでてくるハワイにおける日本人最初のキリスト教組合派



ハ ワ イ 島 略 図
（ヒロタイムス編『移民百年記念ハワイ島日本人移民史』1971年，より）

の伝道師、岡部次郎がハワイアン・ボードの秘書エマーソン（Emerson）に送った英文の報告にしばしば星名の名前が登場する。彼に関係ある記事を拾ってみる。一八九一年六月二二日の報告では、

K・ホシナという若い人物をワイアケア・プランテーション（Waiakea Plantation）より得ることに成功した。ヒロにおけるすべての日本人キリスト教徒は彼が非常に好きになり、彼はすでに我々の教会（ヒロ教会）で日曜日に朝の学校をはじめた。……我々は教会堂で次の火曜日から歌のクラスを始めようとしており、また他のプランテーションでは夜学校を作ろうとしている。私は彼の助けによって遠からず大きな仕事が成就されんことを望む。[20]

とあり、彼がヒロのワイアケア耕地にいたことがわかる。同年七月一一日の報告では、

同僚ホシナは今夜パパイコウへ説教に行き、私はワイアケアからもどったところである。私は彼が非常に好きだ。私は有能な人を得て、もう困難な仕事をする必要がなく、我々の夜学校や歌のクラスや祈りの集会が非常にうまく行なわれている。[21]

また八月二二日の報告では、

私はハマクアから数日前にもどってきた。その時私はホシナ氏をホノカア（Honokaa）にずっと働いてもらうため残してきた。我々はその地区が宗教的な雰囲気が希薄で道徳的な感情が弱いのがわかった。換言すれば、我々はその暗い地区に光をあてるため〝正義の太陽〟を本当に必要とする。我々が仕事をするのに、すべてがそんなにこまった状況だということを知って失望したかどうかを、私はホシナにたずねた。しかし彼は私にノーと答え、その活動場所が最悪の状況であるが故に、自分の努力によってしかよくならないだろうと答えた。[22]

ハマクアやホノカアは前出のククイハエレに近く、ハワイ島北部にある。さらに一一月一五日の報告では、もう少しくわしく彼のことが述べられている。

私はこの三カ月間の仕事のことで言いたいことがいっぱいある。とりわけ言いたいのは、私の助手のK・ホシナとS・ミネギ

シ両氏と彼らの仕事についてである。ホシナ氏は東京の青山学院を卒業し、契約労働者としてこの国に来た。彼が日本でたびたび聞いた苦しみをもつ同じ国の人たちを助けようと思ったのである。彼はプランテーションで一労働者として職務を遂行しながら、彼が数年前に見出しそして信仰する彼の創造者への祈りとともに、〝この世の中で自分の使命は何か〟について本当に真剣に考え続けた。彼はついに、キリストの福音があるにせよ、世界を救う全能の神のお召しほどすばらしく尊いものはないと賢明に結論づけた。ハワイアンボードが彼を雇うやいなや、このハワイでの特別な仕事のため、神が日本の外へ彼を呼んだのだということを十分自覚しながら、彼は熱情をもって仕事に行った。私が彼と一緒に三カ月ほど前、ハマクアへ仕事を始めに行ったとき、我々ががっかりするようなことばかりだったので、私は彼に活動の場所が都合の悪い状況だとわかって失望していないかどうかをたずねた。しかし彼は失望していなかった。いやそれどころか、彼は希望に満ちていた。ここ三カ月間、彼は首尾よく仕事をしたため〝正義の太陽〟が暗黒のハワイの日本人の上にすでに輝きはじめた。遠くない将来、我々はヒロでやったのと同じように、そこでキリスト教の団体を組織することを期待する。H氏はしばらくの間、ゆっくりと寝る場所ももたず働いた。しかし最近、古い家を借りるのに成功し、それを完全に修理し、ホノカアで何不自由なく暮らしている。[23]

星名が契約労働者としてハワイに来たとあるが、これが事実かどうか、外務省外交史料館で調べてみたが、確認しえなかった。いずれにしても、これらの報告によって、彼が岡部牧師の片腕として、ヒロを中心に、周辺の砂糖きび耕地を馬などに乗り熱意をもって伝道した姿が想像される。そしてホノカアに一時期居住していたのである。前掲のククイハエレ耕地の同胞銃傷事件はこの報告の直後、彼の近辺でおこったものである。

ところで、彼とともに岡部牧師の助手として活躍した峯岸繁太郎が渡米するため、その後任者として一八九四年ハワイ島ホノム（Honomu）に来た同志社出身の首我部四郎牧師[24]の回顧録のなかに、当時の伝道師の仕事のようすや岡部・星名のエピソードがのせられているので次に紹介したい。

そういう時代だったから伝道師だといったところで今日のように、サンデーの説教だ、ウェンスデーのプレイヤー・ミーティングだ、家庭訪問だといったようなのとは違って、領事館の掛合、正金銀行の送金、横浜ジャパンの代筆から、引っきりなしに起

った夫婦喧嘩の仲裁、耕主への交渉一切の事の相談相手でもあり、村長のようでもあり、我の如きは、今日では何一つ自分でせず、オートモビルのドライブすら出来ない男になってしまったが、その当時では天長節のような時には、詩吟や剣舞劇までも教えたもんである。

岡部次郎氏の如きは、東洋豪傑肌の牧師であったから、従って、ミスター・キンネー〔当時のホノム耕主――筆者注〕の如き人とも、大いに共鳴し、一日談興に入り『それじゃあ、君達にやらせて見るから一つ、やって見よ』…『いかにもやりましょう』と、いうことで、いよいよ星名謙一郎君をヘッド・ルナとして、之から打ち始めようという段取にまで運んだ時ホノルルから計画不承知の書が来たので、それっきりになったと、いう話も残っている。[25]

さて岡部牧師は一八九二年に日本へしばらく帰ったが、[26]その間、星名はヒロ教会にあってハワイアン・ボードに英文のレポートを送っている。六月に送ったものの全文訳を、彼の数少ない記録文として次に紹介する。

ヒロにあるこの教会のレポートの中で私はいうが、この三カ月間、ここではたいしたことはおこらなかった。オカベ氏が日本へ行って以来、我々は教会について、そのメンバーが欠けないようにという、いくらかの心配があった。しかし神の最大限の救いにより、我々はすべてたゆまずに天国の門に向いつつある。さらに神は、最近この国にやってきた新しい同胞を我々に与えてくれた。もちろん彼らはすべて仏教信者であり、キリスト教について聞いたこともない人達である。

彼らは毎日曜日、説教を聞きにやってきて、非常に喜んでいるようにみえる。そして教会のメンバーの礼儀正しさやキリスト教の教義そのものに驚いている。彼らはみな日曜学校に出席し、喜んで外国人教師から学んでいる。キリスト教が何かを知らない日本人が新しく出席することによって、その人の心を暖かくしているように、私には思える。

日曜日、四〇人以上の出席者があり、その大部分が学校に出席している。毎火曜日の夜、我々は教会で祈りに集まる。二〇人以上出席する。ファーニォー夫人（Mrs. Furneaux）、リビングストン夫人（Mrs. Livingston）、マーチン氏（Mr. Martin）やその他の人達が、祈りの前一時間、我々に歌うことを教えてくれる。我々は以前より進歩し、じょうずになった。

五週間ほど前、私はヒロから五マイルほどのオノメア・プランテーション（Onomea Plantation）で夜学校を開いた。そのプランテーションは約二〇〇人の日本人を含んでいる。最初五〇～六〇人ばかりの人が私のところに聞きにきた。そして次の時、聴衆は四〇人をこえていた。彼らは集会の場所として彼ら自身の小さななやを建てたいと私に言った。これが一番望ましい場所

であり、都合がいい。パパイコウの夜学校も都合はよいが、平均の出席者はそれほど多くなく、一五人のみである。他の夜学校はワイアケアとワイナプ（Wainapu）にあり、六、七人程度の出席者にすぎない。洗礼を受けたい人は一五人ばかりいる。〔ヒロに駐在し、ハワイアンボードに支援されたK・ホシナのレポートより〕[27]

当時の移民の中には、無教育で無頼漢に近い者も少なくなかったといわれる。そうしたなかで、キリスト教・仏教の伝道者は、布教伝道のかたわら、日本よりハワイに来た人達に英語教育などを行なうため、夜学校などを開いて努力を続けたのである。そのありさまがこのレポートによくあらわれている。岡部牧師は日本に帰り、同志社から奥亀太郎ら少壮宗教家を伴ってきた。[28]その直後、理由は不明だが、星名は伝道師を辞職することになる。これについて、岡部牧師の一八九二年一〇月二六日の報告に次のような記事がある。

私は今朝ハマクアに行こうとしていますが、問題点を書いておきたい。私は地方委員会に相談し、オク氏をホノルルに遣わすことを決めた。そしてオク氏を引継ぐためホノムにミネギシ氏をよんだ。そのためハマクアの活動場所はしばらく伝道者がいなくなる。ホシナ氏の辞職も受け入れた。彼は一農民として火山道路のアラド（Alad）に住もうとしている。将来自給伝道をはじめようとしている。ハワイアンボードは辞職を受諾するかどうか。ホシナ氏が私のもとをはなれた場合、私は月二〇ドルの給料で助手としてシモムラ氏を雇うことをボードにお願いしたい。[29]

星名が辞職して農民として住もうとしたアラドの地名は不明だが、おそらくハワイ島のヒロからキラウエア(Kilauea)火山に向かう火山道路の途中であろう。このあたりに労働者のキャンプがあり、また日本人のなかに牧畜や木炭焼きに従事する者があったらしい。[30]それはともかく彼が一八九二年の時点で辞職したことが事実とすれば、前掲の奥村のパパイコウ基督教会の記事と年代が符合しない。これ以後、彼は具体的にどこで何に従事していたのかわからない。曽我部の回顧録のエピソードにあるように、砂糖きび耕地の労働監督を実際に行なっていたかもしれない。事実、彼

の親族の回想記には、彼はハワイ時代、アメリカ人経営の製糖会社に就職し、支配人の地位に就いたという記述[31]や、砂糖のプランテーションとか土木工事の総締といった仕事をしていたという記述[32]もみられるが、その年代・場所など詳細なことは一切不明である。

ところで、岡部牧師は一八九三年オアフ（Oahu）島ホノルル（Honolulu）に赴き、牧会のかたわら、一八九四年頃『布哇新聞』[33]を発行していた。この新聞について、奥村多喜衛の次のような回想録がある。

明治二十七年余が布哇に来た時。岡部次郎氏は『布哇新聞』と云ふものを発行して居た。此新聞は瀬谷氏とかドクトル内田氏などの経営したもので。布哇に於ける最初の邦字新聞であつた。翌年岡部氏当地を去るに臨み。余に教会と共に新聞をも引受けさせようとて。此新聞は教会の付属物であると云つた。余は牧師が世俗の新聞をやるはよくない。第一伝道に用ゆべき時間の大部分を之に費さねばならぬ。次には無益に敵を作る。色々と不利益が多いとて断然之を斥けた。そこで已むを得ず星名氏と新井氏に譲つたのである。その新聞は後段々に代り変つてやまと新聞となり今の日布時事となつた。[34]

岡部牧師は、一八九五年世界周遊の旅に出発した。その後任の奥村牧師に代わって、星名と新井という人物が『布哇新聞』の発行を引継ぐことになる。星名もこの頃、ホノルルに移っていたのであろう。彼が発行した新聞が、一八九五年『布哇新聞』を引継ぐかたちとなった『やまと新聞』であったかどうかすら、今のところ不明である。ところで後に『やまと新聞』を改題して『日布時事』を発行、社長兼主筆であった渓芳相賀安太郎が、一八九六年はじめてハワイにやってきて、ホノルルに着いたとき、星名に出会っている。相賀の回顧録よりその時のことを引用しよう。

チャイナ号がホノルルに着いたのは、明治二十九年（一八九六）二月二十八日で横浜を発ってから十一日目、その時のホノルルの港と、船から見た市街は、なんだか薄汚い淋しい感じと、まだ三月にもならぬのに、その暑いのに驚かされた。

当時のハワイは王朝没落後まだ間もなく、大統領サンフォード・ビー・ドールの下に、兎も角も太平洋中ポリネシヤン民族の有する唯一の独立国ハワイ共和国の時代で、税関吏がやって来て、種々の取調べをした。その頃の規則で日本からの移民はみな

少くも百円の所謂「見せ金」を所持していねばならぬことになっていた。これは上陸後、公共の厄介にならぬようにとのためであった。実のところ私は日本を出立の際やっと船賃が出来た位で、此の百円の「見せ金」に困り、栃木の豪農の息子の山中茂三郎という親友の一人から、之を借用して来たので、銀行から一円札で百枚渡して呉れたのを、その儘大事に持って来たのである。ところが税関の官吏中に一人、人相のけはしい日本人の通訳がいて、いきなり其の札束を私に叩き付けて、此の忙しいのに、一々こんなものの勘定が出来るか」と怒鳴られたのには先づ此方の荒胆を抜かれた。

併し間誤々々すると、上陸に難癖を付けられてはと、我慢して黙ってはいたものの、実に失敬な奴だと思ったが、後日互に相知るようになり、共に相許す親しき間柄となった。

此の男こそ星名謙一郎氏で、当時のインテリ中の怪雄であり、志保沢氏（『布哇新報』の社主――筆者注）とも親交深く、後年テキサス米作発展の波に乗って、夫人を伴うて彼地に赴き、そこでは一敗地に塗れしが、次ぎには単身南米の大舞台に乗り込み、ブラジルにて成功せしも、ついに不慮のことで、土人の兇手に仆れた数奇の運命の持主であった。[95]

彼の星名に対する初印象は非常に悪かったわけである。しかしながらこの記事で、星名が当時、税関の通訳の仕事も行なっていたことがわかる。ちなみに、相賀は後に大正天皇の即位の大典が行なわれた時（一九一五年）、日本を訪問して、京都での盛儀のあと、同志社創立四〇周年記念祝賀会にも出席した。「此の時同志社の職員及び教員中には、ハワイに来ていた縁故のある奥村牧師令弟奥村鶴松、竹林熊彦、末広浅次郎、富森幽香子、星名謙一郎夫人久子の諸氏が居り、久し振りの旧交を温めた。」[96]とある。

さて、星名謙一郎と末光ヒサ（久子）との結婚であるが、まず末光ヒサの生いたちからみていくことにする。彼女は、一八七四年（明治七年）六月、伊予国卯之町に生まれた。父は末光三郎、母はチカで、彼女は男三人女六人の兄弟中五番目に生まれた。地元の開明学校を卒業し、星名と同じ吉田町の油を商う浅野家に嫁ぐが失敗。従って星名とは再婚ということになる。のち裁縫などを習い、一八九五年（明治二八年）上洛して、同志社女学校普通科二年に編入

され、一八九八年（明治三一年）これを卒業し、さらに専門部英文科にすすんでいる。結婚に関する記録としては、彼女が晩年になって書いた履歴書に次の事項がある。

明治三二年七月　家事都合により右退学
明治三二年七月より三六年七月迄　布哇在、米婦人ミセス・ウイリアムに就いて洋裁縫、刺繍を学び、ミセス・ビカントに就き家事を学ぶ。

ハワイへ行ったのは当然結婚のためであるから、結婚は一八九九年（明治三二年）ということになる。また彼女の「辞世のことば」[37]にも、三二年ハワイ在住の星名謙一郎と結婚したとある。

ところが外務省外交史料館にある「海外旅券下付表」の明治三四年度（一九〇一年）「愛媛県庁」の項に、末光ヒサの名がでており、旅行地名「布哇」、旅行目的「婚姻ノタメ」、下付月日「三月十二日」となっている。明らかに明治三四年（以降）、結婚のためハワイに行ったことになる。さらに彼女が卒業した同志社女学校の同窓会から発行された『同志社女学校期報』によれば、明治三四年六月発兌の第一六号に、「末光久子は保科（ママ）謙一郎氏と結婚の約整ひ今春布哇に向て御出立の途次来校せられたり其住所はハワイホノルヽ」という記事がある。また同じく明治三三年二月発兌の第一三号には、「末光久子は伊予卯之町末光三郎氏方。去夏兄君〔長兄の類太郎――筆者注〕を失はれし御不幸に引続き御両親の御体すぐれざるより知子〔妹トモ――筆者注〕と共に家政を助けらる」とある。従って、明治三二年結婚というのは、彼女の記憶違いで、その年中途退学し、いったん故郷の卯之町に帰り、明治三四年春ハワイに渡り、[38]結婚したのであろう。星名家の伊予吉田と末光家の卯之町は隣町の関係で、彼の幼少の頃のエピソードが示すように、交流が頻繁にあり、しかも両家とも地方の名家ということで、結婚話が進んだものと思われる。結婚した頃、彼は何に

従事していたのかはっきりしない。前掲の『星名秦の生涯』によると、やはり邦字新聞発行の仕事にたずさわっていたらしい。しかし新聞の記事のことでトラブルがおこり、相手にけがを負わせてしまい、これがもとでハワイを去ることになったとある。また二人には長女が生れたが、すぐに亡くなった。[39] とにかくこの新婚夫婦にとって、ハワイはよい思い出がなかったようで、ヒサ夫人にとっては、わずかの在留期間の後、アメリカ本土に渡ることになる。ハワイを去ったのは「星名ヒサの履歴」によると、一九〇三年（明治三六年）七月である。

三　テキサスおよび一時帰国時代

彼が次に登場するのは、アメリカ合衆国テキサス州である。当時ハワイからアメリカ大陸へ転航する日本人おびただしく、とくに一九〇三年頃から一九〇六年頃までの転航者の数は約五万七〇〇〇人にのぼったと伝えられている。これは一般的には、一九〇〇年に契約労働制が廃止されて、労働者が自由の身となった結果、これまでの圧迫に対する反動の現象であり、またアメリカ本土の方がハワイより賃金が高くよいところというわさによったものである。[40] しかし、テキサスにおける日本人の米作は、はじめから労働者の出稼ぎのためのものではなく、若干の資本を有するものが永住覚悟で開拓していく、独特のものであった。[41] 彼の場合、心機一転し広大な大地に新しい運命を開拓せんと、いくばくかの資本をたずさえてやってきたにちがいない。ハワイを去った翌年の一九〇四年（明治三七年）のことである。彼の名前を知るきっかけになった前掲の『移民調査報告』の、テキサス州に日本人が米作を始めた翌年の一九〇四年の記事に彼の名がでてくる。

翌千九百四年中西原清東大西理平西村庄太郎等ハ「ヒューストン」市附近「ウエブスター」地方ニ各三百噸（エーカー――筆

者注〕ノ土地ヲ買入レ爰ニ初メテ本邦人土着米作ノ俑ヲ作リタルノミナラズ事業ヲ継続シテ今日ニ至ル更ニ同年中橋本順三ハ「ガーウード」ニ吉村大次郎浅井松太郎ハ「リーグシチー」ニ星名謙一郎、西野伊勢松両名ハ「オルデン」ニ各百六十噎ノ土地ヲ買入レ八十噎ニ作付シタルガ橋本順三ノ外ハ同年限リ其農場ヲ閉鎖スルノ止ムヲ得ザルニ至レリ[48]

とのことで、残念ながら彼の農場も一年限りで閉鎖してしまったようである。日本人米作者の年代別の表にも彼の名は一九〇四年度のところにしかでてこない。なお同志社社長であった西原清東も、この年から米作をはじめていることがわかるが、彼の農場の方は、彼の子息清顕に引継がれ、最近まで続いていたようである。[49] また片山潜が星名と同じく「オルデン」で一年後、一六〇エーカー買入れ、五〇エーカーに植付けたが、一年限りで事業を廃止していることが記載されており、大変興味深い。テキサスの米作に関する資料は『日本外交文書』などかなりみられるが、星名に関しては、わずか一年しかたずさわっていなかったせいか、これ以外に名前がでてこない。あと一つ、入江寅次『邦人海外発展史』上巻のテキサスの邦人米作の項に「星名謙一郎が家族と共に布哇からやって来て、茨城県人西野伊勢松兄弟と組合ひ、米作を始めたのもこの頃（明治三七年春）のことであった。ヒューストン市北方オルデン附近である。かくの如くして明治三十七年中は、八組の日本人が四ケ所に分れて米作を試み、相当の盛況を呈したのであるが、吉村、浅井等の一組は内部の不統一から間もなく解散し、星名、西野の共同耕作も失敗に帰し、結局ウエブスターの三組（西原、西村、大西）と、ガーウードの橋本だけが予期の成績を挙げた訳だ。[44]」と先の『移民調査報告』と同じようなことが書かれている。西野伊勢松なる人物は茨城県人とのことであるが、それ以外のことは全く不明である。『移民調査報告』の日本人米作者の表で、農場員数男三、女一になっているが、これはつまり、星名夫妻と西野兄弟になると思われる。

ところで、星名夫妻が、なぜハワイからこのテキサスに来て米作を試みたかという理由であるが、これもはっきりしない。たぶん西原清東との関係があると思われる。同じ四国出身のクリスチャンであり、彼の妻ヒサが同志社女学校に在学中、西原は同志社社長であった。そういった関係から、星名夫妻はテキサス米作の中心人物西原清東を頼って、この事業に協力しようとしたと考えられる。もう一つ、彼の同郷の村井保固は森村組のニューヨーク支配人であり、テキサスの米作に力を入れ、[45] 先の『移民調査報告』にみられる大西理平を援助したという記録[46]もあるため、こちらの関係も考えられるが、定かではない。

日本米の試作はわりと順調だったようである。また謙一郎は射撃が上手で、よく狩りに出かけ、ヒサがかわりに米作をやったこともあったらしく、牛の群れがやってきて、こわい思いをしたという思い出話が残っている。[47] またテキサスへ来て間もない一九〇四年五月二〇日、長男の秦が生れた。同地で生れた最初の日本人で、通称「テキサス」と呼ばれるに至った。しかしせっかく軌道にのりかけた農場経営も、ヒサの父の末光三郎が「重病にかかり余命いくばくもなしと日本よりの報知に接し、資産はいつでも造れるが、親の顔は二度と見られないからとて」[48] 帰国せざるを得なくなり、全財産を処分して、長男秦をつれて、三人で帰国したのであった。結局、テキサスに滞在したのは「星名ヒサの履歴」によると、一九〇四年四月より一九〇五年七月までとなっている。しかし彼女の「辞世のことば」では一九〇七年（明治四〇年）一〇月、父の死の一週間前に横浜についたとある。帰国するのに二年以上では長すぎるが、このあたりどうなっているか不明である。いずれにしても、この一家にとって、テキサスでの暮しも長くなかった。

帰国してすぐの一〇月二三日に、ヒサの父親の末光三郎が亡くなった。一家はしばらく宇和町の卯之町教会の裏にある末光家の別荘にいたが、[49] 間もなく謙一郎の妹キヨの嫁ぎ先である松山市持田町の津下（つげ）家に寄寓した。[50] ここには、

謙一郎の父幸旦が明治一六年に死んでから、母コウが身を寄せていた。またその後小さな家を借りて住んだという。[51]この松山滞在中の一九〇八年六月に秦の妹幸子が生れた。[52]

それからほどなくして、やむなく日本に帰国したが狭い日本にじっとしておれなくなった謙一郎は、今度は南米開拓を思い立ち、妻子を残して単身渡航することになる。多分一九〇九年（明治四二年）のことであろうが、確かではない。これ以後ついに彼は日本へ帰ることがなかった。妻ヒサとの生活も、わずか八年ほどの短い期間であった。ヒサの方は、松山女学校にしばらく勤務したあと、母校の同志社女学校に迎えられ、恩師でもあるデントンの世話と看護に生涯を捧げることになる。

四　ブラジル時代

南米では彼は最初アルゼンチンに渡ったらしいが、[53]アルゼンチンにおける彼の記録は未見である。当時、日本から直接アルゼンチンにむかったものはほとんどなく、一九〇八年、笠戸丸にて第一回移民としてブラジルに渡った人達のうちから、さらにアルゼンチンへ転入した人が多かった。彼の場合は逆であり、まもなくブラジルに転じたが、やはりブラジルの場合も、彼が渡ったのは初期の時代であった。彼ははじめリオデジャネイロ（Rio de Janeiro）州の山縣農場[54]にしばらくいて米作をやっていた。この農場の出身者に、後日サンパウロ（Sao Paulo）に来て活躍した人々が多いとのことである。星名も一九一五年（大正四年）頃、日本人移民の多いサンパウロ州に来住し、翌一九一六年の初め『週刊南米』と称する菊版三、四〇ページの雑誌風の謄写刷新聞を創刊した。ハワイで邦字新聞を経営した経験を生かしたものであろう。これはブラジルにおける日本人最初の邦字言論機関紙である。社はサンパウロ市に続くサ

ンターナにあって、記者は二名、出入りの常連も数名いた。しかし『週刊南米』は極度に星名の個性が出すぎ、この時代の読者層には難しすぎて、わずか二年余りで廃刊になったという。[55] 彼は次に植民地事業のほうに没頭していく。当時ブラジルにいた日本人はおよそ一万五〇〇〇人、『週刊南米』では、そのうちコロノ移民といわれる貧しい農業労働者の土地定着を論じ、特に土地購入・植民地開設の気運の促進に力を注いだが、彼自身、サンパウロの西八〇〇キロメートルのブレジョン（Breijao）植民地、およびさらに三〇キロ奥にバイベン（Vae-Vem, 梅弁）植民地をおこそうと、土地を求めて売り出しにかかった。その開設はともに一九一七年（大正六年）のことと思われるが、確かではない。[56] いずれもソロカバナ鉄道沿線では、日本人がおこした最初の植民地である。しかし開設当時、鉄道はブレジョン植民地より約七〇キロ手前のインディアナ（Indiana）駅までしか通じていなかったため、ほとんど入植者はなく、経営は困難であった。そのためブレジョン植民地の方は、一九一八年（大正七年）北海道からやってきた小笠原尚衛と共同経営に転じた。[57] 小笠原尚衛は高知県出身、武市安哉の聖園農場に第三次入植者として一八九五年（明治二八年）北海道樺戸郡浦臼に移住、しかし毎年のようにおこる石狩川の氾濫のため、一九〇二年名寄に行き、その後間もなく中川郡美深に移って宗谷線きっての農業経営をしていた。[58] ところが、聖園農場第一次入植者で、星名と同じ東京青山学院出身の海外植民学校校長・崎山比佐衛の南米移住事業に共鳴し、尚衛の父である九一歳の吉次をはじめ、一族四七名が他家族一三名とともにブラジルに渡り、[59] 松村総領事の紹介で、星名と知りあったのである。小笠原尚衛は数万の金を携行したが、なお経営困難のため一九二三年（大正一二年）星名と手を切って別れたときには、数万の金は消えてしまい、その六年間にマラリアなどのため一族の墓が一七に及んだという。[60] その後、小笠原尚衛はセントラル線イタケーラに移り、そこでは失敗したが、サンパウロ市郊外の町アルジャで成功し、名誉市民権を贈られたそうである。[61]

さてブレジョン植民地の方は、徐々に入植者の数を増し、発展していった。そのようすが泉靖一編『移民――ブラジル移民の実態調査』に記されているので、主なできごとを拾って、年表風に紹介する。

一九一九年　五十家族。ブレジョン第一小学校開設（ブラジルで第一〇番目の日本人小学校）。アルヴァレス・マッシャード日本人会はじまる。

一九二〇年　鉄道開通。暮に一八〇家族。

一九二一年　マッシャード連合日本人会。

一九二二年　第二小学校開設。

一九二三年　再度星名の単独経営。

一九二四年　日本人会館が作られる。

一九二六年　第三小学校、第四小学校開設。

現在このあたりアルヴァレス・マッシャード（Alvares Machado）と呼ばれ、地方小都市になっているそうであるが、星名は、この植民地完成のため文字どおり奮戦したのである。そしてさらに飛躍を試みようとしたとき、一ブラジル人のため、アルヴァレス・マッシャード駅で、ピストルでうたれ、悲惨な最後をとげてしまった。大正天皇の死の直前の一九二六年（大正一五年）一二月一三日、六〇歳の還暦を迎えたばかりのときである。前掲の『移民――ブラジル移民の実態調査』には次のような記述がみられる。「彼はその頃やはりコロノ上りに自由植民の道を開いて活躍していた上塚周平と組み、ノロエステ、ソロカバナ両線で旱魃を受けた植民者の危機を救うため、日本政府に申請して八十五万円の低利貸付資金をえた。たまたまこれを受取りに出発する際、伊系伯人労働者のうらみを買って射殺され

たものだった。[62]」彼は間違って殺されたという説もあるが確かでない。還暦で一時帰国するような話もあったが、果せなかった。彼が亡くなって三カ月ほど後の一九二七年（昭和二年）二月二八日付『毎日新聞』に、小笠原一族のことと、星名の死を報ずる記事がでた。直接関係ある項目を次に紹介する。

人も知る故小笠原吉次翁が九十一歳の老躯をひっさげ、六十余名の家族を引つれ奮然立ってブラジルに移住したのは大正七年九月のことであった。当時この老翁の軒昂たる意気に誰も等しく驚嘆の眼を見張ったが何としても九十一歳の老齢、翁はすでにその時天寿を失ひかけていて上陸後間もなくその地に安らけく眠ってしまった。

その後の小笠原一族はどうなったか、聞くところでは翁の次男小笠原尚衛氏は信用して共同事業を目論んだブラジルで鰐（ジャカレー）と異名をとった星名謙一郎氏のためにことごとくしてやられ、買った土地も持ち物全部もまき上げられて悲境のドン底に沈み、一族は喧々囂々「星名を葬れ」と叫ぶ者、責任者たる尚衛氏を罵る者、殆ど収拾すべからざる状態となったが、尚衛氏はその責任を一身にかぶって一語も発せずただ星名氏に危害を加へんといきりたつ一族中の若者をなだめることにつとめ、身にあびせられる悪罵には何等の弁解も試みなかった、その態度は人を見るの明なく「ジャカレー」星名のために、ことごとくしてやられたとはいへ、同情にあたいするものがあったといわれている。

一方星名謙一郎氏も遂に大正十五年十二月十三日、その取引関係にうらみを含んだ、ブラジル人ジョゼ・プレステス・デ・オリベイラのためにソロカバナ線アルバレスマッシャード駅頭でピストル射殺されたそうだ。〔下略〕

なくなった星名謙一郎をひどく悪くいった記事で、かなり彼は誤解されていたと思われる。このとき彼と親しかった当時のブラジルの多羅間公使は夫人の星名ヒサにこの反論を書くようすすめたが、ただだまっていたという。彼はアルヴァレス・マッシャードの墓地に眠っている。正宗の名刀と遺髪が日本に送りとどけられ、遺髪は京都の等持院の墓におさめられている。財産表も送られてきたが、彼の所有する農場の広さは四国ぐらいの広さだったという。それは多羅間公使が一時ひきとったあと、だれかが引継いだそうだが、[63]今はどうなっているのだろうか。

むすびにかえて

『ブラジルに於ける日本人発展史』上巻によると、彼は、ブラジルでは、かなりの産を成しながら、茅屋に住み、愛犬とアンタ（貘）を飼い、移民の孤児を養いながら生活していた。また彼のことを次のように評している。「非常に意志の強い人であって、時には無慈悲にさえ見えたが、決して私利私慾の徒ではなく、一面高き識見と熱き涙とを有していた」[64]。彼はその風貌や性格からジャカレー（鰐）と呼ばれ、誤解されやすかった面もあったと思われる。しかし、彼がブラジルで最初の日本語新聞を発行したことだけでも、充分に歴史的意義を持つものであり、さらに植民地を創設した功績は大きく、もし彼がいなければ、その地方の発展はなかったかも知れない。ブラジルの日本人移民については、最近平野運平などについてかなり紹介されているが[65]、星名謙一郎についてはあまり知られていない。先にあげたような業績だけをとりあげても、彼はもっと評価され、世に知られてよいのではなかろうか。彼はこれまでみてきたように、ブラジルのみでなく、ハワイ、テキサスにおいて、それぞれの移民の草創期に生活し、つねに「移民の先駆」と呼ばれるにふさわしい活躍をしてきた。しかしあまりにもその活動範囲が広すぎたために、かえって彼の全貌をとらえにくく、知られざる人物にしてしまったのかもしれない。

この報告で、彼のたどった人生の時々の点を集めて線とまではいかないまでも、せめて点線ぐらいまでたどることができただろうか。今後さらに資料を収集して、彼の人生そのもののような太い線を描きたいと思っている。

付記　本稿は、一九八三年より発足した「海外移民ならびに海外伝道に関する研究」班において、六月二四日の「星名謙一郎について」と題する報告をもとにして起筆したものである。本文中のハワイアン・ボード関係の資料は、The Hawaiian Mission

Children's Society Library. 所蔵になるもののうち吉田亮氏の筆写によるものを使わせていただいた。資料の収集にあたり、青山学院大学図書館資料センター、京都大学文学部図書館、同志社大学図書館、同志社女子中高図書館、外務省外交史料館、伊達博物館、吉田町立図書館、海外日系人協会ならびに江上幸子先生、末光力作先生、宮沢正典先生、末光亮一氏、吉田亮氏の協力を得た。厚く感謝の意を表します。

(1) 拙稿「明治期・テキサスの日本人米作者――西原清東・片山潜・星名謙一郎をめぐって」(『同志社時報』第五九号、一九七六年)。

(2) 伊達家史料「鶴鳴餘韻・上巻　秀宗公御事蹟」。

(3) 同前「貞享三年吉田御分人之覚」。

(4) 大乗寺の過去帳・墓石銘、「伊尾喜家文書」(『伊予吉田郷土史料集』第二輯、一九八〇年、所収)などによる。

(5) 吉田町立図書館蔵。

(6) 同前。

(7) 宇和町在住の末光亮一氏(九一歳)の話による。同行した亮一氏の父親末光辰五郎から聞いた話とのことである。

(8) 末光信三「新島先生と伊予青年」(『新島研究』第一九号、一九五四年)。なお、江上幸子氏などの話によると、類太郎の長男で、永年、伊予銀行の頭取であった故末光千代太郎の名前の由来は、千代田城のみえるところで生まれたからであるという。

(9) マックレーは、米国メソジスト監督教会の宣教師として、中国福州における伝道の後、一八七三年、日本に赴任し、東京英和学校(現青山学院)の前身、美会神学校を設立した。一八八七年帰国。

(10) 青山学院大学図書館資料センター所蔵。なお、明治一八年の規則では、予科五年・本科四年だが、明治二〇年には予科四年・本科四年となり、さらに明治二二年には、予備学部四年・高等普通学部三年となっている。

(11) 入江寅次『邦人海外発展史』下巻(井田書店、一九四二年、覆刻版一九八一年、原書房)三〇六ページに「星名は明治二十四年、一移民として布哇に渡り」云々とあるが、何を典拠としているのか不明である。

(12) ハワイ日本人移民史刊行会編『ハワイ日本人移民史』(布哇日系人連合協会、一九六四年)、永井松三編『日米文化交渉史』第五巻「移住」(洋々社、一九五五年)などによる。

(13) ヒロタイムス編『移民百年記念ハワイ島日本人移民史』(ヒロタイムス、一九七一年、以下『ハワイ島日本人移民史』と略す)によると、ヒロ教会はヒロ市ケアウエ街ワイルク川近くに建てられ、この教会堂は移民記念館として、一九六九年、愛知県の明治村に寄贈された。

(14) 奥村多喜衛『布哇伝道三十年略史』(一九一七年) 六ページ。なお、岡部については、『ハワイ島日本人移民史』の第三部「半世紀前の日系移民——先駆者・岡部次郎氏のことなど」に詳しい。
(15) 同前、七ページ。
(16) 同前、六二—六三ページ。
(17) 同前、六八ページ。
(18) 木原隆吉編著『布哇日本人史』(文成社、一九三五年) 四五四—四五五ページ。なお、前掲『ハワイ日本人移民史』にも同様の記述があるが、これは同書からの引用である。
(19) 吉田亮氏の筆写によるもの。
(20) 同前、筆者訳。
(21) 同前。
(22) 同前。
(23) 同前。なお、文中の「S・ミネギシ」とは、峯岸繁太郎のことである。『布哇伝道三十年略史』『ハワイ島日本人移民史』および、相賀渓芳(安太郎)『五十年間のハワイ回顧』(同刊行会、一九五三年)、井上彦三郎・鈴木経勲『南島巡航記』(経済雑誌社、一八九三年) などによると、彼は水戸に生まれ、小笠原諸島からミクロネシアのポナペ島に渡り、田口卯吉が東京府士族の授産事業調査のため、南洋渡航した時、来船して一行を驚かせたという。ポナペミッションに属し、一八九一年 米国伝道船 モーニングスター号にて ハワイに来航。ホノカアやホノム地方の伝道に従事するが、一八九四年渡米する。一八九七年再びハワイに来て、オーラーに新伝道地を開いたが、翌年日本に帰国した。その後、田口との関係からと思われるが、東京経済雑誌社を経営していたという。
(24) 彼は、福岡県生まれ、徳冨蘆花の今治時代の友人であり(大正一五年、彼の著『もう三十弗』に蘆花は序文を書いている)、ハワイに来て、邦人子弟の教育のため保能武義塾を創立、経営した。
(25) 前掲『ハワイ島日本人移民史』二〇一ページ。なお、この回顧録は、「一九四〇年十月二十六日付、ハワイ毎日特集号ホノム版より転載」とある。
(26) 前掲『布哇伝道三十年略史』七ページには、「我同胞の数は頻りに増加して已に二万五千に達し伝道は日に益々其切要を感ずるに至りたるを以て。伝道会社は岡部氏を日本に派し。布哇伝道の急要を説き伝道者を募集せしむ」とある。
(27) 注(20)に同じ。
(28) 前掲『ハワイ島日本人移民史』一六三—一六四ページ。奥の他、江口一民・神田重英・江上源三の名があがっている。なお同書では、奥梅太郎となっているが、奥亀太郎が正しいであろう。
(29) 注(20)に同じ。
(30) 前掲『ハワイ島日本人移民史』一〇九ページ。
(31) 前掲『星名秦の生涯』二四三ページ。

(32) 星名ヒサ（弟末光信三代筆）「故人のことば」（昭和二九年五月九日）。

(33) この新聞について、前掲『ハワイ日本人移民史』では、日本字新聞・雑誌の創刊の年代別表で三番目、新聞のみでは二番目にあげられている。その発行年月日、名称、代表者名、発行地については、次のようになっている。「明治二十六年（一八九三）五月十九日、週刊、布哇新聞、内田重吉、ホノルル」。なお、この新聞は、後に、『やまと新聞』→『日布時事』→『布哇タイムス』となるが、それぞれ同様に、「明治二十八年（一八九五）十月十五日、日刊、やまと新聞、大和倶楽部、ホノルル」→「明治三十九年（一九〇六）十一月、日刊、日布時事（やまと新聞改題）、渓芳相賀安太郎、ホノルル」→「昭和十七年（一九四二）、日刊、布哇タイムス、相賀重雄、ホノルル（日布時事を改題）」となっている。

(34) 奥村多喜衛『太平洋の楽園』（三英堂書店、一九一七年）一九五―一九六ページ。

(35) 前掲『五十年間のハワイ回顧』七―八ページ。

(36) 同前、二九八ページ。

(37) 前掲「故人のことば」。

(38) 江上幸子氏によると、ヒサ自身の思い出話として、ハワイに着いた時、「日本では港へ行くのに人力車を使っていったのに、ハワイに着くとひとりでに走る箱（自動車のこと）があったのでびっくりした」という。当時、国内はまだかなり交通が不便であったことがしのばれる。

(39) 江上幸子氏による。なお長女の墓は、ハワイに残されているとのこと。

(40) 前掲『布哇日本人史』、『五十年間のハワイ回顧』、『ハワイ日本人移民史』などによる。

(41) 入江寅次『邦人海外発展史』上巻（井田書店、一九四二年、覆刻版一九八一年、原書房）や前掲『日米文化交渉史』第五巻「移住」などによる。

(42) 外務省通商局『明治四十三年・第二回移民調査報告』（一九一〇年）二一四―二一五ページ。

(43) 前掲拙稿参照。最近のこの地方の状況については、高知新聞社編集局編『アメリカ高知県人』（高知新聞社、一九七五年）に詳しい。

(44) 前掲『邦人海外発展史』上巻、四八六―四八七ページ。

(45) 大西理平『村井保固伝』（村井保固愛郷会、一九四三年）

(46) 加藤新一編『米国日系人百年史』（新日米新聞社、一九六一年）、および前掲『邦人海外発展史』上巻など。

(47) 江上幸子氏による。

(48) 前掲「故人のことば」。

(49) 末光亮一氏による。

(50) 星名ヒサの晩年の履歴書には、本籍地が愛媛県温泉郡道後村大字持田二七〇番地になっている。

(51) 江上幸子氏による。

(52) 現在の江上波夫氏夫人幸子氏。
(53) 青柳郁太郎『ブラジルに於ける日本人発展史』全二巻（同刊行委員会、一九四一―四二年）などによる。
(54) 同書上巻によると、この農場を経営していた山縣勇三郎も興味ある人物である。彼は一八六〇年、長崎県平戸に生まれ、志を立てて北海道に渡り、根室で炭坑、海運その他、手広く実業界に進出したが、日露戦争後失敗し、一九〇八年ついにシベリアを経てブラジルに渡り、一九一一年、リオ州において約五〇〇〇町歩の土地を購入し米作・甘蔗栽培ならびに酒精醸造を行なうなど、いろいろ事業をおこした。一九二四年死去。
(55) 同書下巻、四九九―五〇一ページ。
(56) 同書上巻三八二ページ。なお、島澄「地方小都市の日系コロニヤ――ソロカバナ線アルヴァレスマッシャードの事例」（泉靖一編『移民――ブラジル移民の実態調査』古今書院、一九五七年、所収）四〇八―四〇九ページには、一九一五年一二月、星名はブレジョン植民地を起こし、二年後にバイベン植民地を開設した、とある。また、外務省通商局『移民地事情』第四巻（一九二三年）は、このあたりの植民地視察報告であるが、残念ながら、星名の名前は出てこない。
(57) 前掲『ブラジルに於ける日本人発展史』上巻、『邦人海外発展史』下巻、『移民――ブラジル移民の実態調査』などによる。
(58) 『聖園教会史』（日本基督教会聖園教会、一九八二年）。
(59) 同書三四八ページ、および吉村繁義『崎山比佐衛伝』（海外植民学校校友会出版部、一九五五年）一二四―一二五ページ。このことは、この頃珍しい大家族の移住で、新聞紙上を賑わし、世人が眼をみはる壮挙であったという。
(60) 前掲『ブラジルに於ける日本人発展史』上巻、『邦人海外発展史』下巻。
(61) 『在伯北海道人史』（在伯北海道協会、北海道百年記念）一七六―一七八ページ。
(62) 前掲『移民　ブラジル移民の実態調査』四一一ページ。
(63) 江上幸子氏による。
(64) 前掲『ブラジルに於ける日本人発展史』上巻、三八五ページ。
(65) 醍醐麻沙夫『森の夢――ブラジル日本人移民の記録』（冬樹社、一九八一年）、北杜夫『輝ける碧き空の下で』（新潮社、一九八二年）、前山隆『非相続者の精神史』（御茶の水書房、一九八一年）など。